様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２６ 日現在

機関番号：４２１０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２０１５７

研究課題名（和文）戦後フィンランドの民族文化研究における「スラブ文化影響説」と政治の関係

研究課題名（英文）The Relationship between the so-called "Slavic Culture Impact Theory" and Politics in the Field of Finnish National Cultural Studies after the Second World War

研究代表者
石野　裕子（ISHINO, YUKO）

常磐短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：７０４１８９０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、フィンランド民族文化研究において第二次世界大戦後に浮上した「スラヴ文化影響説」を、戦後に大きく展開したフィンランドの政治動向と照らし合わせて考察した。その結果、フィンランド民族文化が他文化の影響を受けた普遍的な文化であるという言説は戦後すぐになされていったものの、「スラヴ文化影響説」は1960年代まで議論の俎上にあまり上らなかったことが明らかになった。政治動向と文化研究の「ずれ」も確認できた。

研究成果の概要（英文）：This research analyzes the so-called “Slavic culture impact theory” which appeared after the Second World War in the field of Finnish national cultural studies. This research especially notices the relationship between this theory and Finnish political trends, which changed dynamically after the War. This research finds that the discourse about Finnish national culture had been influenced by other cultures and Finnish national culture should be seen as a universal culture just after the War. But the “Slavic culture impact theory” has not been much discussed in the academic field until the 1960s. This research also reveals there is a sort of time difference between political trends and cultural studies.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：ヨーロッパ　フィンランド　民族文化　ナショナリズム　文化表象

１．研究開始当初の背景

国民国家形成期において、自民族意識が覚醒されていく中で、民族的な文化的表象が誕生し、その表象が独立への象徴的存在となっていくのは、世界各地で見られる現象であった。フィンランドにおいても、国民国家形成期において編纂された叙事詩『カレワラ』（1835 年に初版発行、1849 年に再編纂）が自民族文化の代表とみなされ、19 世紀中葉から後期に花開いたフィンランド民族文化運動の象徴的存在となった。しかし、その内容は『カレワラ』の編者ロンルートが意図的に「フィンランド民族らしさ」を付け加えたものとなっており、かつての統治国であるスウェーデンの文化、あるいは当時の統治国であったロシア帝国の文化ではないフィンランド独自の文化の「創造」を意識して編纂したものであった。この点については、すでに指摘されており、国民国家形成期における『カレワラ』が果たした役割に関しては既に優れた研究がある。しかし、『カレワラ』がその後も「純粋な」フィンランド民族文化として位置づけられ、その位置づけが政治的な動向と連動して、イデオロギーとして利用されていった政治的側面については、これまでほとんど言及がなされていなかった。特に、叙事詩『カレワラ』の基となった口承詩を謳う詩人が多く居住していたフィンランド域外のロシア・カレリア地方への関心が政治的運動と連動し、この地域を併合しようとする運動へと発展していった点については、政治史の側面から研究されてきたものの、その運動の「根拠」として『カレワラ』のフィンランド性が利用されていった点についても、あまり注目がなされてこなかった。

そのような研究状況を考慮した上で、申請者はこれまでフィンランドの知識人による『カレワラ』解釈が、ナチス・ドイツの台頭やソ連によるフィンランドへの政治的圧力といった国際関係の緊張の中で生じたロシア・カレリアを併合しようとする政治運動に、イデオロギーとして利用されていった経緯を研究してきた。その際、『カレワラ』は他の文化の影響を受けていない「純粋な」フィンランド民族文化という解釈がなされていたのである。しかし、戦後になると、以上のような政治的色彩を帯びた『カレワラ』解釈は影をひそめ、『カレワラ』は世界共通の文化遺産という主張がなされ、文学的価値の高い作品として『カレワラ』の普遍性を強調する動きが見られた。さらには、戦前否定されたスラブ文化影響説を取り上げる研究が登場し、フィンランド民族文化におけるスラブ文化的要素が議論の俎上に上ったのである。

そこで申請者は、『カレワラ』を中心としたフィンランド民族文化研究におけるスラブ文化影響説の議論に注目し、フィンランド民族文化解釈が第二次世界大戦前から戦後にかけてどのように変容したのか、特にフィンランド民族文化におけるスラブ文化を中心とした他民族文化の影響に関する解釈の変化に注目した。

２．研究の目的

本研究の目的は、叙事詩『カレワラ』を中心としたフィンランドの民族文化研究において、第二次世界大戦後に浮上した「スラブ文化影響説」を、戦後に大きく展開したフィンランドの政治動向と照らし合わせて考察することにより、フィンランドの民族文化研究と政治の関係を明らかにすることであった。具体的には以下の３点を明らかにすることを目的とした。

（１）フィンランド民族文化、特に『カレワラ』解釈の変遷とスラブ文化を中心とした他文化の影響説についての議論との関係
（２）『カレワラ』解釈と政治動向との関係
（３）戦前と戦後の『カレワラ』解釈の変化と「スラブ文化影響説」との関係

以上の検討課題を考察、分析することで戦後のフィンランド民族文化解釈と政治との関係を明らかにし、さらにはフィンランドが有してきた対ロシア観を文化的側面から浮き彫りにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究の方法は資料分析である。本研究課題を遂行するために、以下の資料を中心に収集、分析を行った。なお、ほとんどの資料は現地フィンランドに所蔵してあったため、研究期間中 2 度現地調査を行い、資料収集に務めた。なお、資料収集にあたっては渡航前に事前調査を行っていたため、効率的に資料にあたることができた。また、先行研究や同様の事例を扱った研究に関しては、事前に資料を取り寄せ整理を行うことで、比較分析の効率化を図った。

（１）フィンランド文学協会文学資料館にて、同協会の会報誌及び議事録の閲覧

初年度にあたる 2012 年 8 月に約 2 週間、フィンランドに現地調査に赴き、戦間期から 1945 年までのフィンランド文学協会の会報誌及び議事録を閲覧及び収集を行った。フィンランド文学協会は、フィンランド独立以前の 1831 年に設立以来、現在に至るまでフィンランド民族文化研究の拠点であり、フィンランド民族文化を世界に発信する中心地である。民族文化研究者たちのフィンランド民族文化観についての変容を把握するとともに、同協会における「フィンランド民族文化」観を明らかにするために、第二次世界大戦前から戦後にかけての民族文化普及に関する協会の方針及び会長、副会長の演説に見られる民族文化観を検討した。特に、年始演説や記念年時の演説に注目した。2013 年度には、前年度に収集した資料分析を引き続き行っ

た。特に、1945 年から 1950 年代の同様の資料の言説分析を行った。2014 年 8 月に再びフィンランドに渡航し、残りの資料、特に 1960 年代前半の資料を中心に収集し、これまでの議事録の分析の整理を行った。資料分析からは戦前と戦後にかけて民族文化観の変化が見られたので、その変化がどのような変遷をたどったのか分析を行った。

（２）国立文書館、国立図書館における「スラブ文化影響説」に関する資料収集及び分析

2012 年度に行った現地調査にて、「スラブ文化影響説」について言及した研究書及び研究誌を中心に文献収集を行い、同時にフィンランド文学協会およびヘルシンキ大学に所属する現地協力者との交流を通じて、先行研究についての整理を行った。しかし、「スラブ文化影響説」について言及した研究は想像以上に少なかったため、文献収集にあたっては民俗学者の研究だけではなく、歴史学者、政治学者といった他分野の研究にも範囲を広げて行った。2013 年度は、前年に収集した資料分析を行った。特に歴史学者が記した資料の言説分析に集中した。カレリア史研究の分野から、フィンランド民族文化とカレリア文化および「スラブ文化」の接点を見出すことができた。2014 年度に行った現地調査では、戦後フィンランドにおける「スラブ文化」に関する資料収集及び分析を行った。また、同時に戦前の「スラブ文化」に関する資料収集も行い、その言説の差異についての言説分析をした。その結果、戦後の言説は戦前の言説をあまり使用していないことが判明したが、分析対象となる資料が少なかったため、さらに検証が必要であることを実感した。

（３）『カレワラ』解釈の変化と政治

上記の（１）（２）と同様に、2012 年度および 2014 年度に行った現地調査にて、資料収集を行い、帰国後に資料分析を行った。『カレワラ』解釈の変化については本研究以前から取り組んでいた課題でもあったので、本研究期間では分析資料の範囲を広げるとともに、研究の精密化を図った。特に、『カレワラ』にスラブ文化的要素が見出せると主張した民俗学者ヘイッキ・キルキネンの学説及び彼の学説の影響力についての分析を行い、フィンランド民族文化の象徴的存在であった『カレワラ』に他文化からの影響が存在したという「新たな」学説に対する学界の反応および世論の反応について考察を行った。以上のような『カレワラ』解釈が政治とどのような関係にあったのかを考察するのは容易いことではないが、新聞での取り扱われ方といった世論の反応を通じて、対ソ友好路線をとったフィンランド政治との接点を模索した。

４．研究成果

2012 年度には本研究の土台となる博士論文（『「大フィンランド」思想の誕生と変遷–叙事詩カレワラと知識人』岩波書店、2012 年 8 月）および戦間期のフィンランド民族文化表象を題材とした論文（「両大戦間期のフィンランドにおける民族文化表象と政治―1935 年の『カレワラ』百周年と 3 つのカレワラ祭を題材に―」『北欧史研究』29 号、2012 年 9 月)を上梓した。これらの研究成果では、戦前の「スラブ文化」影響説についてはあまり分析できなかったものの、戦前のフィンランド民族文化は、スラブ文化はもとより、他の文化の影響を全く受けていない純粋なフィンランド民族独自の文化としての『カレワラ』が、膨脹主義のプロパガンダとして巧みに利用されていった政治的な動きを明らかにした。また、戦後において『カレワラ』が有してきた「民族文化」色を払拭し、突如世界に誇れる普遍的な文化としての側面が強調されていった経緯について明らかにした。2013 年度は本研究の中間報告として、２度国際学会において発表を行った。特に 5 月に行った北欧研究の学会としては世界最大規模である Society for the Advancement of Scandinavian Study の年次大会での報告（The Birth and the Transition of Greater Finland: Focused on the interpretations of the Epic Poetry Kalevala）では、世界各国の研究者から有益なコメントをいただき、研究の方向性についての確証を得ることができた。6 月の立教大学史学会大会シンポジウムでの招待講演（「独立フィンランドにおける自国史の『創造』」）では、日本、オスマン・トルコの事例と比較することができ、世界との比較といった視野を広げることができた。最終年度にあたる 2014 年度は、主に資料分析に集中するあまり、１件の研究会報告（『大フィンランド』の後に―第二次世界大戦後のフィンランド民族文化の表象―）、バルト＝スカンディナヴィア研究会）に終わってしまったが、2 度にわたる海外調査で収集したフィンランド文学協会の膨大な議事録及び会議録の分析を行うことができた。その結果、フィンランド文学協会内での議論は、戦前と戦後にかけて大きく変化、すなわちスラブ文化を始めとする他文化とフィンランド民族文化との接点についての容認がなされていったことが明らかになったが、「スラブ文化影響説」いついては、1950 年代の時点ではそれほど議論の俎上に載せられていないことも明らかになった。その一方で、政治の世界では、対ソ友好路線が全面的に押し出され、戦前の反ソ的な言説は影を潜めた。つまり、このような説は 1960 年代以降に本格的に議論されたことになり、対ソ友好路線をとった政治路線と学術研究との「時差」が見られた。この「時差」については今後国内政治と学界との動向を考慮してさらに精査する必要があるものの、本研究の課題の多くは達成することができた。

ただし、いくつか反省点および課題点もある。本研究期間の3年間において代表者は所属機関を2度変更したため、想定していた研究計画を変更せざるを得なかった。具体的には2年目に実施予定であった海外調査を最終年度に回さざるを得なかった。そのため、最終年度内において研究成果を予定通り出すことがかなわなかった。しかし、本研究の成果は、現在（2015年5月）執筆中の一般向けの概説書において、フィンランド民族文化についての新たな側面について一般社会に広く発信する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）
（１）石野裕子「両大戦間期のフィンランドにおける民族文化表象と政治―1935年の『カレワラ』百周年と3つのカレワラ祭を題材に―」『北欧史研究』29号、2012年9月、22-45頁。（査読有り）

（２）石野裕子「独立フィンランドにおける自国史の『創造』」『史苑』74巻、2014年3月、51-66頁。（査読なし）

〔学会発表〕（計　4　件）
（１）Yuko ISHINO, The Birth and the Transition of Greater Finland: Focused on the interpretations of the Epic Poetry Kalevala, Society for the Advancement of Scandinavian Study Annual Meeting 2013, the San Francisco Hilton Financial District, San Francisco(United States), 3 May 2013.

（２）石野裕子「独立フィンランドにおける自国史の創造―『大フィンランド』思想と民族概念の変遷を中心に―」2013年度立教大学史学会大会シンポジウム、立教大学（東京）、2013年6月22日。（招待講演）

（３）Yuko ISHINO, Where is the Sphere of Finland: The Relationship between Greater Finland and “Finnishness” during the World Wars”, The Fifth East Asian Conference for Slavic and Eurasian Studies, Osaka University of Economic and Law (Osaka),9 August 2013.

（４）石野裕子「『大フィンランド』の後に―第二次世界大戦後のフィンランド民族文化の表象―」バルト＝スカンディナヴィア研究会、早稲田大学（東京）、2015年1月24日。

〔図書〕（計　1　件）
石野裕子『「大フィンランド」思想の誕生と変遷-叙事詩カレワラと知識人』岩波書店、2012年8月、288頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
石野　裕子（ISHINO YUKO）
常磐短期大学・キャリア教養学科・准教授
研究者番号：70418903